

表現運動の学習指導における諸問題

宮 川 則 子

1 はじめに

現在、小・中学校でおこなわれている表現運動領域^{注1)}の学習は、模倣の運動、民舞を含むフォークダンス、マスゲーム、舞踊劇、創作ダンス、リズムダンス等と、その内容はさまざまである。そしてその学習指導における現実には少なからず問題があり、表現運動領域の学習指導が敬遠されがちなその状況は、指導内容や方法の混乱も伴って、樂觀できるものではないと思われる。舞踊活動の教育的価値については、“その目的は人間形成にある”として、既に述べてきた^{注2)}ものであるが、教育現場で舞踊の学習指導をおこなうと、子どもたちの姿の中に正に「舞踊の目標は、全く完全な幅をもった経験をするための個人の能力をあくまでも拡大し、かつ深めることである。そしてその結果、人間は受け身ではなくて、創造的にその生命の限りを生きぬくことを学ぶのである。」^{注3)}(マーチン)ということの実現をみるのである。一人ひとりがみな違い、個性をもち、さまざまな輝きを見せてくれる子どもたちに対して、個を十分に生かしていられるという意味からも、舞踊の学習はたいへん重要なものであると考える。しかしながら、ぼんやりと輪郭のはっきりしない“表現運動”なるものを前に、表現運動領域の運動の特性^{注4)}に触れさせるべく努力し、それゆえに、指導者はこの領域の学習指導について、「困っている」「やりにくい」「わからない」という悩みをもっているのである。さらにこの現実には、表現運動の学習指導に実際にかかわる以前から「何となく扱いにくいもの」として、この領域を遠ざけてしまう傾向までも生み出してきている。

そこでここでは、長野市内の小学校(54校)への質問紙による調査から、小学校で体育の係として体育の研究を進め、その学校の体育科としての運営に中心的に携わる立場にある教師の、表現運動領域の学習指導にかかわる意識をとりあげてみたい。これにより、学習指導における、「困っている」「やりにくい」「わからない」等の内容をさらに明らかにし、表現運動の学習指導のあり方、そして表現運動そのもののあり方を見直すための足がかりとするものである。

2 表現運動への取り組みについて

これまでに筆者は小学校の教育現場で表現運動領域を扱い、多くの貴重な経験をしてきた。中でも授業中いつも驚かされるのは、子どもたちの中から新しい動きやアイデアが次々とわき出てくるということであった。それらは一見素朴であり、うっかりすると見逃してしまうようなものであったりもするが、実はたいへんな輝きをもったもので、幾度となく指導に行き詰っ

ている筆者を助けてくれた。表現運動領域においてその舞踊作品^{注5)}にかかわっている限り、そのように子どもたちも教師も同じ場所に立ちながら、両者で作品をつくっていったのだと思われる。このように、子どもの側からも教師の側からも、個性を生かし、主体的に取り組むことのできるはずである表現運動領域が、扱いにくいものとされ、実際の取り組みにおいては消極的であるというのが事実である。

図1は、表現運動をどのような形で扱っているかという点についての回答結果である。

図1

a (26%)	b (68%)	c (6%)
---------	---------	--------

- a. 表現運動は運動会のためにおこなうのみである。
- b. 表現運動を普段の体育の授業でおこなっている。
- c. 表現運動はほとんどおこなっていない。

以下は、回答a～cそれぞれについての理由である。

〈a. の理由〉

- ① 運動会でおこなうダンス（表現運動）に多くの時間がかかってしまうなどの理由から、授業時数内での時間的な余裕がなくなってしまう。
- ② 運動会を機に集中しておこなうと、効率的であるから。
- ③ 学校の年間指導計画に位置づけられていないから。
- ④ 子どもによって好き嫌いがあり、その差が大きい。
- ⑤ 子どもたちが興味をもって取り組まない。
- ⑥ 低学年での系統的な指導ができない、あるいは、それを高学年の学習へとつなげていくことができない（学級担任の交代、学級編制替え等により）ため、子どもに興味をもたせることがむずかしい。
- ⑦ 表現運動の授業を、どのようにおこなったらよいのかがよくわからない。指導方法がわからない。
- ⑧ 扱いたい気持ちはあるが、思い切って取り組むことができない。
- ⑨ 授業として成立するのか、成立させられるのか、怖いという面がある。

〈b. の理由〉

- ① 学習指導要領や学校の年間指導計画に位置づけられているので、それに沿っておこなっている。
- ② 運動会での表現運動の発表は、日常の体育学習の発表の場として考えている。よってそのような位置づけで日常の体育学習と運動会とに取り組んでいる。
- ③ 子どものこれまでの運動経験によるところの個人差が、比較的小さい。
- ④ どの子どもにも、喜びを味わわせることができる。

- ⑤ 自分の内でイメージをふくらませる喜び、それを表す喜び、そしてつくり出す喜びや満足感を味わわせることができる。
 - ⑥ 子どもが個性を発揮できる。
 - ⑦ 子どもが感情や思いを表すのに有効で、楽しめる。
 - ⑧ 自己表現ができるように。自己を表出すること、表現することは、個を育てるのに大切であると考えから。
 - ⑨ 身体表現がのびのびとできる子に育ってほしいと願っている。
 - ⑩ さまざまな運動の経験をさせたい。
 - ⑪ 全身の調和的発達を図ることができる。
 - ⑫ 表現力を高める。
 - ⑬ 創造力を高める。
 - ⑭ 自由な動きをつくり出すことで創造性を、また、つくり踊ることで身体の使い方を身につけられる。現在の子どもに不足している点がこれらの活動の中に含まれている。
 - ⑮ グループで作品をつくり出すことにより、子どもの間での相互理解が深まる。
 - ⑯ 学級経営にも大きくかかわってくる。
 - ⑰ 研究会などで表現運動の研究を深める機会があり、教師自身が表現運動の良さを感じている。
 - ⑱ 低学年を受け持つようになり、表現運動がやりやすくなったから。
 - ⑲ 表現運動に適当な素材や教材があるから。
 - ⑳ 研究会などで重点的に表現運動に取り組む機会を得たから。
- 扱い方、取り組み方等にかかわる回答——
- ㉑ 体育の授業に限らず、音楽のうた、国語の物語等、身体表現をおこなっている。
 - ㉒ 全校運動に表現運動をとりいれている。
 - ㉓ 運動会に合わせて、体育の学習でおこなっている。
 - ㉔ 普段の体育授業の発表の場が運動会であるような位置づけはしているが、どうしても「運動会のため」という意識が強くなってしまう。
 - ㉕ 扱いにくい領域なので、運動会や高原学校^{注6)}でのフォークダンスなどに限られがちである。
 - ㉖ フォークダンスをおこなう程度である。
 - ㉗ 民舞に取り組んでいる。
 - ㉘ 「体育の学習」^{注7)}等を参考におこなっている。
 - ㉙ 体育の係として、表現運動に取り組むように働きかけてはいるが、むずかしい点が多い。

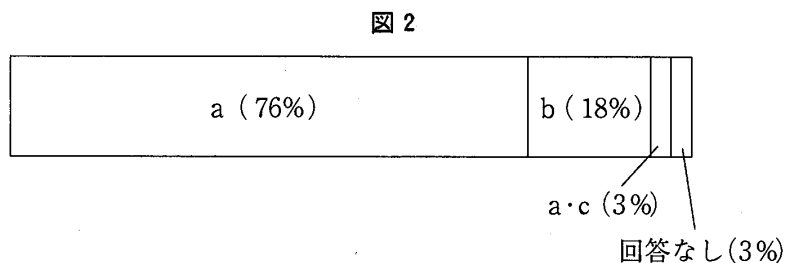
<c. の理由>

- ① 年間指導計画に位置づけられていないから。
- ② 運動会でおこなうダンス（表現運動）にたいへんな授業時数を費やすため。
- ③ 高原学校でおこなうフォークダンスを扱うのみ。

④ 表現運動は扱いにくいので、取り組まない傾向になってしまう。

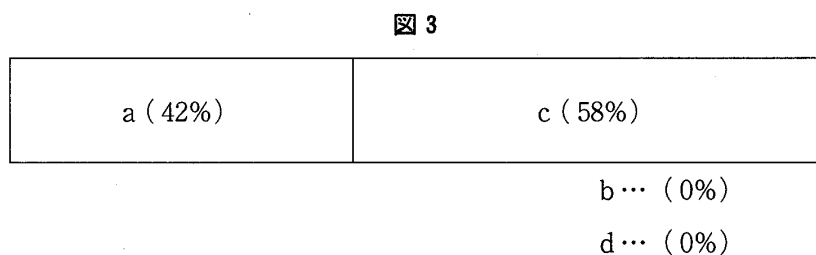
図1のb, cの中には、日ごろ体育の授業で表現運動はおこなっているものの、時間的、内容的に、ほとんどおこなっていないような状況、すなわちb, cにまたがる形での回答があった。また、表現運動が運動会のダンスとのかかわりからさまざまな形で扱われること、あるいは運動会との関係で位置づけが多様になされることが明らかになってきた。aの②は、運動会の時期に集中しておこなうという回答であるが、これは時間的な要素ばかりではなく、気持ちの上でも、大きな行事である運動会に向かうという緊張感から、効率的な取り組みがなされるものと考えられる。③の「年間計画に位置づけられていないから」というものも、運動会とのかかわりが考えられる。この理由が回答aの理由としてあげられてきたのは、①などのような時間的な理由から“表現運動は、運動会のダンスとして扱う”という位置づけがなされたものと受け止められる。また、実践としては、運動会のダンスの練習をしてそれを運動会で発表するという、ひとつのものであっても、学校内、学年内、係内、あるいは教師個人の中での表現運動の位置づけの違いにより、回答がaであったりbであったりする。これは、それぞれの理由の中に、運動会にかかわる回答（aの①②、bの②）が出てくることにより、知ることができる。

図1は体育の係である教師が自分自身を対象に回答したものであったが、次に示す図2は、体育系の教師の目から見た全校の傾向についての回答結果である。



- a. 表現運動は運動会のためにおこなうだけのクラス(学年)が多い。
- b. 表現運動を普段の体育でおこなっているクラス(学年)が多い。
- c. 表現運動はほとんどおこなっていない。

図3は、同様に体育系の教師が低・高学年別に全校を見たときの、表現運動への取り組みの傾向である。



- a. 表現運動の取り組みは低学年の方が積極的である。
- b. 表現運動の取り組みは高学年の方が積極的である。
- c. どちらともいえない

い。

- d. 表現運動の取り組みは低・高学年ともに積極的である。

図1と図2を比較するとa, bの示す割合が逆転していることがわかる。体育系の教師が、表現運動に取り組むのは運動会のため、また運動会の時期に集中するという全体的傾向を受け止めた結果である。また、そのような状況について「年間授業時数の減少に伴って、創作ダンスに取り組まなくなっているのか…」という回答も寄せられた。体育というとボール運動やゲーム等に偏りやすいといった声もあり、表現運動を体育学習の中にきちんと位置づけることのむずかしさがうかがえる。体育係として、表現運動を年間指導計画の中に確実に位置づけ、運動会の発表のみに終わることのないようにしていきたいという回答もあった。

次に図3であるが、aが42%, bが0%という結果から、表現運動は低学年の方が取り組みが積極的であるという傾向が、さらにそこには、低学年の方が表現運動を扱いやすいという傾向が読みとれる。また、cが58%, dが0%という結果からは、表現運動の取り組みは全体的にはどちらかといえば、あまり積極的ではないということが言える。

3 表現運動の学習内容について

現在、小学校でおこなわれている表現運動は、その内容が実にさまざまである。図4ではいくつかの項目をあげているが、それぞれの項目の内容も多様であると思われるし、さらにそれらを複数組み合わせる指導に当たる実態があるので、「表現運動」といっても、一人ひとりの教師がどのような「表現運動」像を思い描くかは、ひじょうに多岐にわたり複雑である。

図4 表現運動で扱った学習内容

①扱った内容すべて	a (26%)	b (23%)	c (16%)	d (18%)	e (14%)	f
						(3%)
②中心的に扱った内容	a (22%)	b (24%)	c (13%)	d (23%)	e (17%)	f
						(2%)

- a. フォークダンス
- b. 既成のダンスを覚えて踊る
- c. 既成の音楽で自由に踊る
- d. 既成の音楽に振り付けをして踊る
- e. 踊りも音も創作する（踊りのみの創作も含む）
- f. その他…リズム体操、なわとびや器械運動との組み合わせ等

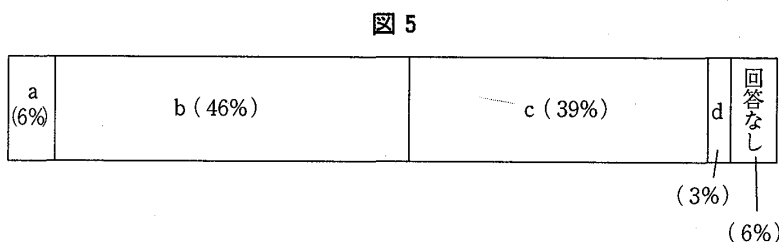
図4から、それぞれの項目の割合に大きな差のみられないことがわかる。これは、先にも述べたとおり、教師がそれぞれにもっている表現運動に対する“像”が違ふのと同時に、それに対する考え方も異なってくることから結果と考えられる。表現運動の輪郭がはっきりしないということは、すなわちそのねらいや評価の基準もはっきりしていないということである。そこで、ねらいや評価の基準について考えようということになったとしても、それぞれに違った表現運動像をもって研究を進めることは、ひじょうに困難であると思われる。

また、学習内容における「発表」活動についての調査では、約82%が何らかの形で表現運動の発表をしているという結果を得ることができた。「発表をしていない。」という回答の中には、「運動会で発表しているので、授業の中で特に発表の場を設けることはしない。」「表現運動の学習では、常に発表しているのと同様であるから、とりあげて“発表”とはしていない。」というものもあるので、実質的に「発表」の意味をもった活動をしている割合は、これよりも大きくなると考えられる。発表の形についてはさまざまで、踊りのみでおこなう、伴奏音をつけておこなう、衣装をつけておこなうなどがあり、それをクラス全員の前で発表する形と、グループ内発表の形をとるものが約半数の割合であった。発表の場所は、観賞者と同じフロアであることが圧倒的で、舞台の上でおこなっているという回答はなかった。

4 表現運動における学習指導について

表現運動における学習指導のあり方については既に確認したものであるが、その上に立って、学習指導現場からのさまざまな問題をどのように考えていったらよいのであろうか。すなわち、表現運動における子どもと表現運動との関係をありのままにとらえ、学習の段階的なねらいを明確に示しながら指導に当たっていくという基本姿勢の上に、現場の「よくわからない」の声に迫る方向を見出すことはできないのであろうか—という問題である。

図5は、表現運動の指導をやりにくいと感じているかどうかの回答を求めた結果である。



- a. 表現運動の指導はやりやすい。
- b. 表現運動の指導はやりにくい。
- c. どちらともいえない。
- d. その他

以下は、回答a～dそれぞれについての理由である。

〈a. の理由〉

- ① 民舞など踊り方のきまったものであるから。
- ② はじめのうちははづかしさもあり、子どもたちは自由な表現ができずにいたが、授業の仕組み方の工夫と積み重ねにより、自由さが前面に出てきた。

〈b. の理由〉

- ① 授業時数内での時間的な余裕がない。
- ② これまでおこなわれてきた経過がない。積み重ねがない。
- ③ 取りかかりの部分で既に始めにくい印象がある。
- ④ 子どもたちに、表現運動の低学年からの積み重ねがない。
- ⑤ 子どもの意識の中に、体育で“表現運動”という位置づけの意識がない。
- ⑥ 表現運動をおこなっても、子どもが喜ぶことが少ない。意欲的でない。
- ⑦ 高学年になると、自由な表現活動に入りにくくなる。
- ⑧ 高学年になるとはずかしさが出てきて、自由になれない。
- ⑨ 低学年からの積み重ねがない場合、高学年になって急にグループで動きをつくるのはむずかしい。
- ⑩ 表現運動では個々の多様性が強く出るし、またそれが重要であるので、指導上の課題がひじょうに多い。
- ⑪ どのようなめあてを与えればよいのかがわからない。
- ⑫ 題材選び、テーマの与え方がむずかしい。
- ⑬ どうやって体を動かすのかがわからない。
- ⑭ 表現の高め方がわからない。
- ⑮ 短い動きで終わってしまうのだが、それに対する指導法がわからない。
- ⑯ 動きづくりにかかわる部分での指導法がわからない。
- ⑰ 動きの伴奏の音、あるいは音楽をどのようにしたらよいのかがわからない。
- ⑱ 子どもたちの意欲を高める指導法がわからない。
- ⑲ 自己評価も含め、表現運動における評価のあり方がわからない。評価がむずかしい。
- ⑳ 教師自身が動きを理解していない。
- ㉑ 教師が子どもの前で演じる（動きを見せる）ことに抵抗がある。
- ㉒ 表現運動に対して、教師自身に抵抗がある。好きでない。

〈c. の理由〉

- ① フォークダンスなどのように踊り方がきまっているものは指導しやすいが、模倣の運動など、踊り方のきまっていないものは指導しにくい。
- ② 学年に合った曲や振りがあれば、指導しにくいことはない。
- ③ どのような題材をとりあげたかによる。題材に対する配慮が大切である。
- ④ 指導内容、子どもたちの創意工夫によって、さまざまな充実度が得られる。そのことによって指導のしやすさがきまってくるという面もある。
- ⑤ 子どもの実態から考えると、むずかしい面、すんなり入って行かれる面、両面がある。
- ⑥ 高学年では、はずかしさに伴うやりにくさ、また学習の内容の程度が高すぎるなどの理由

から、活動がうまく進まないといったむずかしさがある。低学年では、子どもたちの活動へのはまり込みがスムーズなのでやりやすい。

⑦ 教師の気持ちや考え方しだいである。

——やりやすい面——

⑧ 既成の踊りは踊る楽しさに集中できるせいか、指導しやすい。

⑨ 表現運動の低学年からの積み重ねがあると、子どもが抵抗を示さない。

——やりにくい面——

⑩ 動きを多様に教えられない。

⑪ 劇にならないように指導するのがむずかしい。

⑫ 創作は、テーマ、動き等の工夫がむずかしい。

⑬ 題材などの与え方、指導にかかわるさまざまな段階の見極めがむずかしい。

<d. の理由>

① 表現運動の指導の経験がたいへんに少ないので、判断しかねる。

図5から、表現運動の指導をやりにくいと感じている教師が多く、さらに「どちらともいえない。」という回答を含めると、その割合は80%を超えることがわかる。これは、表現運動の指導をややすいとは感じていない教師が、たいへん多いということである。また、それぞれの理由についてであるが、bの「やりにくい」にかかわるものでは、⑥・⑬の子どもの意欲について、さらには意欲を高めるための指導法についての問題をあげた教師が多かった。この他にも、⑦・⑧の高学年児童のはずかしさなどからくる問題、⑪・⑭の活動のねらいやめあて、そして評価にかかわる問題を理由としてあげた教師が多かった。⑬に、「どうやって体を動かすのかわからない。」という理由があるが、これは、表現したいことに適した動きがどのような動きであるのか、その創造の部分にかかわる問題と、実際の動きの可能性（身体のどこをどのように動かすことができるのか）という、運動にかかわる問題が、教師自身においても、指導の対象である子どもに対しても存在すると考えられる。

さて次に、表現運動の指導にかかわって、日ごろ考えていること、問題に感じていることをあげてもらった。

まず、指導の助けになるものへの要望があげられた。

- ・ 表現運動の講習会をおこなってほしい。
- ・ 表現運動の指導について講師を頼んで学習した。そういう機会がほしい。
- ・ 表現運動指導のマニュアルがほしい。
- ・ 基本的な体の動かし方のマニュアルがほしい。基本的なモデルがあれば、それをもとに動きを構成し、表現が高められると思う。
- ・ 表現運動用のCD、テープ、ビデオ等の資料が豊富にあればと願う。さまざまな情報を得

る機会が少ない。

表現運動の指導のやりにくい理由として数多くあげられた「よくわからない」点については、やはり多くの回答があった。

- ・ 表現運動の授業といわれても、実際の授業が見えてこない。表現運動における指導のあり方、楽しく取り組ませられる手だてや方法がわからない。
- ・ どのようなテーマをどんなふうに与えればいいのか、動きづくりはどのようにしたらいいのか、音はどうしたらいいのか等がわからない。
- ・ どのような教材が効果的であるのかがわからない。
- ・ 表現したいことをどう動きにすることができるのか、イメージに伴う動きの見つけ方がわからない。
- ・ 単調な動き、観念的な動きからの脱出がむずかしい。
- ・ 物語的であったり、説明的であったりして中核になる（特徴的な）動きがない。どのように指導をしたらよいのか。
- ・ 子どもから出た動きをどのようにして高めたらよいのか。助言のし方、資料活用の工夫をどうするか。
- ・ 個のイメージの多様性を、グループとしての作品にどう生かしていくか。
- ・ 表現運動に対する評価。自己評価のあり方を含めて、よくわからない。

体育の係として学校全体の体育の実践を見て、表現運動への取り組みにさまざまな問題を感じていることがわかる。

- ・ 運動会のダンスに費やす時間で精いっぱい。時間的に余裕がない。しかし、表現運動は大単元になりやすいという思い込みもあるように思う。
- ・ 「表現運動＝ダンス、運動会」というイメージを、子どもも教師ももってしまう実態がある。
- ・ 子どもの興味がボール運動やゲームに傾くので、表現運動にはなかなか取り組まない。
- ・ 表現運動は、軽く扱われているように思う。
- ・ 高学年になると表現がだんだん小さくなってしまう。「ダンスははずかしい、やりたくない。」という先入観をもっている。
- ・ 表現運動を、全校・全学年で扱っていくための校内での組織づくりがむずかしい。

この他にも教師である自分自身に向けられた声もあった。「自分自身、表現運動が好きではない。照れがある。」「苦手意識がある。」というもの、「表現運動は扱いにくいという印象が強いので“やりたい”“やろう”と思ってもなかなか取り組めない。」というもの、いずれも学習指導に影響のあるむずかしい部分である。

しかしながら、表現運動の教育的価値を認め、今後に向けて考えていくべき方向も示され

た。

- ・ 心の解放、身体の動きの創造性という意味において大切な活動である。
- ・ 感受性を養う、心と体との連帯性を養う、のびのびと自己表現ができる力を養う等、意義と必要性を感じる。
- ・ 個の多様性から考えても、表現運動の有効性が理解できる。
- ・ 低学年のうちに表現することの楽しさを味わわせたい。低学年からの積み重ねが必要であると考ええる。
- ・ 即興的な表現を大いに楽しむことも大切なのではないか。イメージを、すぐに表現につなげることができるようになればと願う。
- ・ 表現運動は、実際にやってみると、教師も子どもも楽しいものである。
- ・ 新たな表現のパターンを子どもに知らせることにより、運動が高まるのではないか。
- ・ 今まで表現運動は避けていたが、今後は取り組んでいきたい。
- ・ 教師の取り組みや考え方しだい。教師自身が活動する姿勢や意識をもたなければ、子どもも動かないのではないだろうか。

5 ま と め

表現運動の学習指導を考える上で必要なことは、まず“表現運動に取り組む”ということであろう。しかし図2の結果から、普段の体育の授業で表現運動を扱っているクラスが多いと感じている回答者は、全体の20%に満たないということがわかる。ここで得られた数字としての結果が、統計的な意味で厳密であるとはいえない。しかし、教育現場でよりよい体育学習を推進しようとしている体育系の教師が、日ごろから感じていることの中には、数字で処理することのできない重要な事実があると考えられる。すなわち、回答者の声から読みとれるように、表現運動への取り組みも消極的であり、学習指導に実際にかかわる以前から、この領域を敬遠する傾向さえも、存在するということである。

さて、表現運動に取り組むことが、まず必要であると述べたが、そこで、ある問題が存在することに改めて気づかされた。それは、指導者それぞれのもつ“表現運動像”がさまざまであるということである。教科や領域の性質上、多様な学習内容（例えば、フォークダンス、リズムダンス、創作ダンス等）すべてをとりあげて指導するということは考えられない。とすると、表現運動を年間指導計画に位置づけるためにも、共通の価値観をもって学習内容を検討する必要が出てくると思われる。これにより、何をもって「表現運動」としているのか、互いの姿が見えてくるのではないだろうか。表現運動独自の教育的効果が期待できる内容をもった領域として、これを教育の中に位置づけていくのであるが、これは学校全体の共通理解を得た上、全体で取り組む必要があると考える。なぜなら、調査結果において述べられてきた、低学年からの積み重ねの問題、時間の問題をはじめとする表現運動にかかわる問題は、いずれも他教科、他領域から立ち遅れた分だけ、全体で取り組むべき必要性が高いからである。

「表現運動は、軽く扱われているように思う。」という回答があったが、ここでは、活動の

ねらいと評価との関連を考えなければならないだろう。表現運動という活動はあるが、段階的なねらいが明確でない、すなわち評価も明確でない。このような状態では何をやっても良く、何をやっても評価されない、ただ「活動している」というだけの領域になってしまう。当然そこに独自の教育的効果は期待できないわけであるから、その領域は教育において重要性を失ってしまうのである。その結果、表現運動はやってもやらなくてもかまわない、という雰囲気をつくり出してしまうのだと考えられる。

「教師の気持ちしだいだと思う。」という回答者の声があった。これが、表現運動の学習指導のあり方を見直すための出発点であると考ええる。表現運動の指導が類型的になるということは考えにくい。よって根本的な部分から、あるいは普遍的な面から、指導者の取り組みの姿勢を後ろ盾にして、表現運動の学習指導に迫っていきたいと考える。

注

- 注1) 小学校第1・2学年の基本の運動における模倣の運動、第3学年以上の表現運動、中学校におけるダンスの領域を含むものとする。
- 注2) 宮川則子、舞踊の本質に触れる舞踊活動、上田女子短期大学紀要第十七号、1994、による。
- 注3) 教育の中でおこなわれる舞踊を指す。
- 注4) 小学校：模倣・変身の欲求の充足を求めておこなわれる運動。 中学校：感じていることや考えていることを自由な動きで、表現したり、特定の踊り方でリズムに合わせて踊ったりして楽しさや喜びを味わう。(文献4)、5)による)
- 注5) 児童が創作した舞踊すべてを指す。
- 注6) 長野市内小学校において第5学年でおこなわれる宿泊訓練の名称。
- 注7) 光文書院発行(著作者代表・宇土正彦)、学習指導要領準拠の参考書。児童書、指導書がある。

引用・参考文献

- 1) ジョーン・マーチン(小倉重夫訳)、舞踊入門、大修館書店、1980. p.254. (Johm Martin, Introduction to the Dance : New York, 1939.)
- 2) 邦 正美、教育舞踊原論、日本教育舞踊研究所、1979.
- 3) 宮川則子「舞踊の本質に触れる舞踊活動」上田女子短期大学紀要、17:99—110、1994.
- 4) 長野県教育委員会、長野県中学校教育課程指導書 保健・体育編、信濃教育会出版部、1992. Pp.264.
- 5) 長野県教育委員会、長野県小学校教育課程指導書 体育編、信濃教育会出版部、1991. Pp.218.
- 6) ルドルフ・ラバン(須藤智恵・秋葉尋子訳)、現代の教育舞踊、明治図書出版株式会社、1985. Pp.164. (Rudolf Laban, Modern Educational Dance, 1948.)